

荻町城跡

15 世紀から 16 世紀にかけて、現在の白川村の地域は、戦国武将の内ヶ島家が支配していた。1465 年、内ヶ島家はこの地を支配下に置き、荻町の南にあった帰雲城を拠点とした。庄川沿いにいくつもの山城を築き、敵対する武家の侵入から領地を守った。

荻町城はその一つで、庄川の東側にある荻町を見下ろす丘の稜線上、集落から 60 メートルほどの高さに、土塁と空堀を中心とした城を築いたと考えられている。この丘は、三方を断崖絶壁に囲まれ、川と、北からの敵が利用する可能性が高かった谷間の街道を見渡せる理想的な場所である。また、周辺にはいくつかの湧き水があるため、水には困らないだろう。

内ヶ島家は、山下氏という武士を雇って山城と周辺の村々を管理させた。そのため、山下氏は宗教を含めた地域の生活に大きな影響力を持っていた。その結果、白川に古くからあった多くの信仰の場は、武士の守護神である八幡を祀る八幡神社に変えられた。また、山下氏は浄土真宗を唱え、庄川流域の仏教の主流となった。

荻町城が実際に戦で試されたかどうかはわからない。1585 年の地震では帰雲城が破壊され、内ヶ島家に致命的な打撃を与えたとされる。荻町城の最後の城主である山下氏勝（1568-1653）は、白川を離れることを選び、後に日本の事実上の指導者となる豊臣秀吉（1537-1598）に仕えた。城は使われなくなり、今では生い茂った空堀がかつての機能を物語っている。